

◆2008年 10月

八木健選「七句」

1. **どこにでも慌て者をり初紅葉** 種谷良二
初紅葉を擬人化する技は・・・なかなかですな
2. **マジシャンのさりげなく吐く葡萄種** 永島唯男
手さばきに気をとられていると・・・全部食べられちゃうぞ
3. **木の実降る時折枝も落ちてくる** 加藤 賢
誰かが登ってるんだね。しまい人間が降る ああ
4. **倒れても弓矢はなさぬ案山子翁** 笠 政人
死んでもラッパを放さなかった木口小平のような・・・
5. **倒れても弓矢はなさぬ案山子翁** 山口濤聲
妻の髭・・・あくまで文芸ですから奥様、ご理解を
6. **踊りつつ抜ける頃合ひ目で知らず** 務中昌己
青春の一ページが昨日のことに・・・
7. **敬老日口だけ達者といはれけり** 有富洋二
寝たきりになってやる・・・と脅したんだろう

足立淑子

めくるめく夢を見ている葉鶏頭
松茸を即火焙りの刑に処す

麻生やよひ

満月やかぐや姫まだおひとりさま
虫時雨中には鳴きたき雌の居り
夫ばかり積み上げ月見豆の殻

青山桂一

来る友を暫く待てよ通し鴨
犬の子も通ることなし猫じゃらし
枯れ色の斧虫一匹隠楯す

種谷良二

肩止まる蜻蛉の妙になれなれし
秋高し我が食欲を持て余す
どこにでも慌て者をり初紅葉

安藤淑子

高僧の衣びかびか秋彼岸
メタリックファッションの出処僧衣かも
滑稽句作つて稽の字覚えたり

井口夏子

おやおや団栗お尻に座布団縫ひ付けて
松茸の香りを盗み帰りましよ
十月や風はワンステップ下がりつつ

有吉堅二

ラ・フランス器量のほどはさておいて
敬老日口だけ達者といはれけり

越前春生

良い顔と思へぬ母似石榴食ぶ
銀座ママ花白粉の路地に住み
自転車を盗み取らるる良衣かな

奥脇弘久

きりぎりす葡萄前進してみるか
禅寺に白く咲いても曼珠沙華
墓地霊園勧誘電話秋彼岸

加藤賢

天高し貰ひ手をりし駒の糞
木の実降る時折枝も落ちてくる

草薙一朗

松茸や今年も凶鑑みて過す
同義語に濡れ落葉あり桐一葉
休刊誌相次ぎ燈火親しめず

小杉隆

朝顔の返礼とどく芋羊羹
またチャンプ庭にゴーヤを植えし罪
江戸つ子を気取り秋蟬大の字に

壽命秀次

はたく手によるよろ止まる秋の蠅
秋の蚊に蚊の涙ほど献血す
台風の目と睨み合ふ鬼瓦

井口寿々子

名僧の読経の伴奏カナカナカナ
一人旅寂しくないか流れ星
天職と云ひつゝ掃除秋日和

稲沢進一

見送りて回転ずしの遠ざかる
秋風や昔貫禄今メタボ

今城夏枝

夫婦喧嘩は犬も食はない秋暑し

奥脇弘久

きりぎりす葡萄前進してみるか
禅寺に白く咲いても曼珠沙華
墓地霊園勧誘電話秋彼岸

笠政人

倒れても弓矢はなさぬ案山子翁
殿様蛙ばつたくはへて穴に入る
吾ながら野暮な仕上り松手入

可知豊親

螻蛄(けら)鳴けば歌女も地虫も押し黙る
老衰の螻蛄に頼まれ蚯蚓(みみず)鳴く

倉方みのる

秋の雷ラチヲの修理手を止める
コスモスや落書き自由な無人駅
暮に勝つも待つた三回うそ寒し

清水吞舟

登山靴遺産分けには加はず
神の旅費錢箱が空になり
居酒屋に夜学終へたる師弟かな

白井道義

台風の予想進路の大きな輪
百歳の母にメールや酔芙蓉
食欲の秋ダイエット先延ばし

高田菲路

露の世やまたも投げ出す為政の座
お見合ひはもうお断り蓼の花
虫の声ローンローンと廃車山

高橋真紀子

秋の蚊の食堂車なり満員電車
山も木もけちらし野分の平等
長電話はしごしてゐる夜長かな

田代青山

ラムネ瓶全身まるで力瘤
向日葵の誰もみぬときスクワット
背とか腹とか鰻にすればどつちやでも

田中章子

何かご用追つても戻る秋の蠅
鳥兜魔法の兜をかぶりしか
振り返るロボットのゐる良夜かな

有富洋二

そこここに鍋の凹みて芋炊会
一張羅つらぬき徹す案山子かな
南瓜取る爺のなかなか石頭

杉村福郎

お手許にお手許なくて走り蕎麦
糸瓜棚動き始めて落ち着かぬ
天高し札に「空あり」駐車場

西をさむ

パリコレに負けぬ案山子のファッション
ショー
運動会フォークダンスの手が震へ
台風と意見の合はぬ予報官

彦阪義久

人様の目線が怖い蛇穴に
どちらから極楽からよ鬼やんま
こぼれ萩左遷に似たる響きかな

高田敏男

反抗期何も言へずに落し文
競輪や耳に鉛筆赤蜻蛉
覗き込む弁天堂や神の留守

高橋素子

葡萄かな袋に隠れ色気づく
三日月の時には痩せる月うさぎ

田代青波

よく食べて秋の金魚となりけり
夏休隣の爺の叱る声
グラジオラスちよつとの事ですぐ倒る

谷むつみ

放屁虫自問自答の食事せり
枝豆は下世話を聞きて果てにけり
芋の秋少し痩せてと医者と言ひ

飛田正勝

今朝の秋熟女のごゑのよく透る
米を食ふ貧しき人や豊の秋
肩書の増へ敬老の会盛り上がる

永島唯男

山寺の訛つてないぞ法師蟬
マジシャンのさりげなく吐く葡萄種
溜息のやうな尾を引く流れ星

原田暉

すずめらの止まり木となり案山子かな
捨案山子他人の空似かと思ふ
蟬捕の子にせみ持たされてをりしかな

日根野聖子

靴跡を均して返す秋の波
居るだけの人にも夜食配らるる
蓑虫やつまめば命やはらかき

藤岡蒼樹

入園のにきびの顔に梨齧る
敬老日化粧の十八番のおてもやん
敬老席祖父引き出しの運動会

藤原セツ子

石垣をつるぼの並ぶ秋気かな
一尾ごと光り残照の鰯雲
黄船菊やつと一輪咲きました

前川敏夫

早朝のまだ生きのいい鰯雲
綱引きの勝者がころび運動会
潔癖の女ほどつき草虱

三木蒼生

スパッツといふステテコのごときもの
まだ黄泉に予約は入れず涼新た
風呼びて何じやらじやらと猫じやらし

虫倉蟬音

四十雀今年そろそろ五十雀
秋の日に光る陽石寺の庭

森田公司

羽抜鶏大事にされて庭にをり
鮎よりもさわがれてゐる鮎もどき
八十を過ぎて狐火まだ見ざる

山岡冬岳

社会鍋入れて年金暮らしかな
運動会張り切り勉強嫌ひの子
事故米が生まれ変はりて今年米

山本けい子

容赦なく雨に打たるる実むらさき
運動会の最終リレー土砂降りの
一番乗り赤穂ゆかりの櫛紅葉

横山喜三郎

お隣の月下美人に呼ばれたる
笑苺食はしてみたき仁王像
天高しベルトの穴の逆戻り

藤森莊吉

社長秘書よく日に焼けて事務を執る
些かの秘め事ありて夜の秋
新涼や湯殿の掃除まで楽し

堀川亮二

唐黍を義歯でかじりて健やかさ
猫じやらし野良猫脇道好みけり
梨狩りの三つ平らく童かな

松井 勉

茂みより裸電柱好きな蝉
秋声の第一声は腹の虫
湖に映る紅葉が主役観光船

三塚美恵子

体育の日片足付ちによろけたり
ゆく秋や手を振る人に気憶なし
前世は魔女かもしれぬ鳥兜

務中昌己

男爵と呼ぶ新じやがのえくぼかな
踊りつつ抜ける頃合い目で知らず
落鮎を煮て喰ふ人の哀れかな

吉田百千草

鰯雲路地から消えし餓鬼大将
馬追を黙らせバイク過ぎにけり
いつか載るお悔やみ欄か草紅葉

山本あかね

緑蔭に脳の喜ぶものを食ふ
サングラスに挨拶されて戸惑へり
天高し牛の旋毛はどちら巻

山本 賜

さるすべり花盛りなら百日紅
歯がまつか柘榴を食べた女の子
残暑から逃げたし朋もアリクイも

山下正純

血に染まる勇気をもって石榴食ひ
運動会カメラ走らせ父走り
根を張りし鐘楼守や実紫

飯塚ひろし

真夜中や歩く案山子も居りさうな
争うて引きし棚田の水落す
俳人が無理やり鳴かす蚯蚓か